

東北地方仏教研修の旅

岡島 秀隆

昭和六二年度の禅研究所参禅会研修旅行は、本州北端の東北地方をはじめ訪れることになった。洞門の名刹である黒石正法寺と法光寺、奥州平泉文化の栄華を今に伝える中尊寺や奥羽第一の霊場として広く世間に知られる恐山をたずねた。本年の研修旅行は、曹洞宗門の諸寺院を拝登し、その実状を見聞することを目的としていることはもちろんであったが、同時により広汎な関心にこたえるべく当初から企画された。地域は青森・岩手二県にとどまる小範囲であったが、イタコの口寄せといった民間信仰の実態や陸奥の地に忽然と現出した平泉王朝文化とそこに深く関わっていった日本仏教の歴史の跡をたどるなど、参加者それぞれの多面的興味を満足させることができたと思ふ。以下にその概要をしるし留めることにする。

七月二〇日(月)

東北地方仏教研修の旅(岡島)

08..25 TDA四六一便に搭乗。名古屋空港発。参禅会会長竹内道雄氏を团长とする総勢三三名は、一路仙台へ向った。

09..30 仙台空港着。帝産観光バスに乗り換え東北自動車道を北上して巖美溪へ向った。

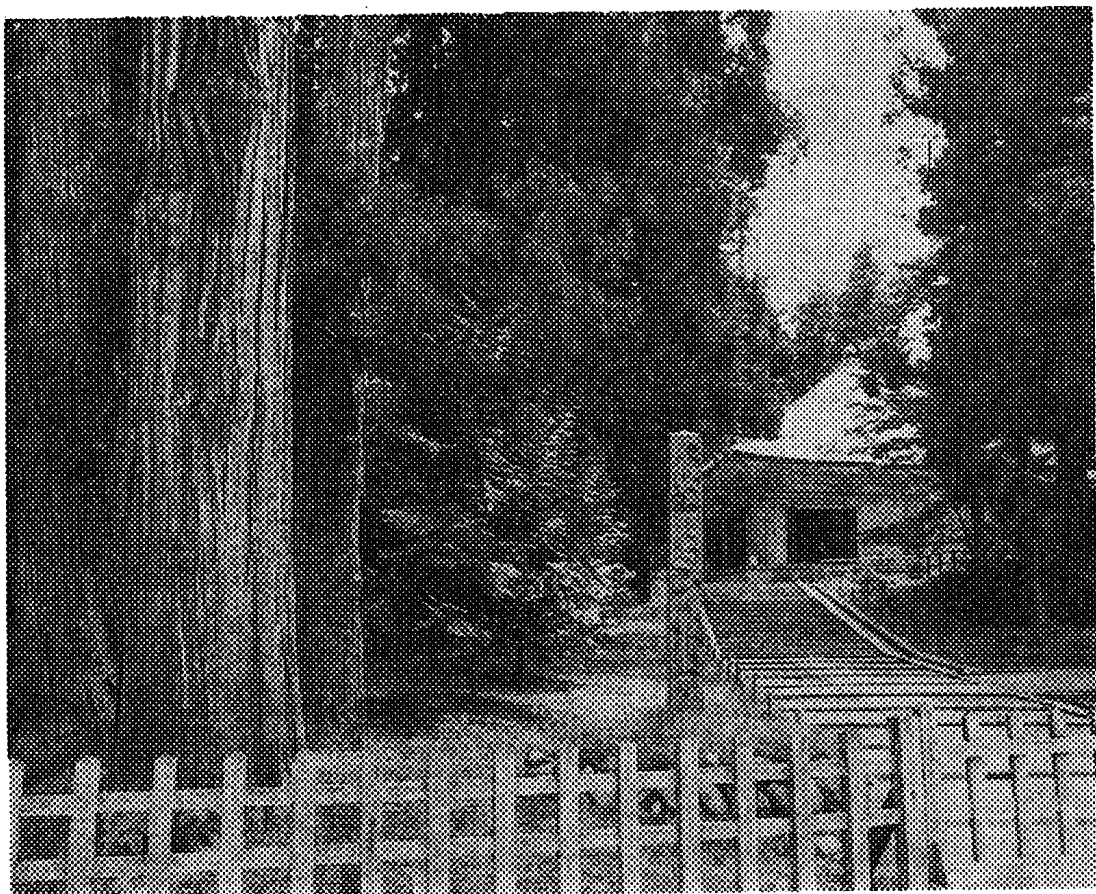
11..30 巖美溪到着。昼食をとり、周りを散策した。

巖美溪は栗駒山から流出する磐井川の奇勝で約二キロにわたって兩岸に甌穴、滝、奇岩、深淵などが続く。流れを逆上れば、そこは神室山地にいたり、栗駒国定公園へ入ることになる。石英粗面岩の河床が急流に侵食され、乳白色の岩肌のまろやかな曲線が有機的に絡みあって、やがてそのすべての異形が漆黒の淵に落ちこんでゆく。雨あがりの足場は良好とはいえなかったが、この自然の造形美に心うばわれつつ、わずかな時間を楽しんだ。

12..40 巖美溪出発。次の目的地中尊寺へ向った。

13..30 中尊寺に着く。

この高名な寺は、正式には関山中尊寺といい、嘉祥三年(八五〇)、天台宗の慈覚大師円仁が開基となつていると伝えられる。貞観元年(八五九)には清和天皇よりその寺号を賜り、後日奥州藤原氏の初代清衡が、二一年の年月を費



中尊寺 金色堂

して造営したとある。『吾妻鏡』（一一八九）の記述では、当時その規模は堂塔四〇余宇、禅坊三〇〇余宇であったという。この寺院の建立は、清衡にとつて、その治世のほとんどをかけての一大事業であったといえようが、その意図は第一に、奥羽全域を巻き込んだ「前九年・後三年の役」での戦没者の追悼のためであり、第二に、この地に仏教文化を移植、開花させんとする発願の故であり、そして第三には、奥羽の安寧と国家安泰を祈るためであったという。境内には諸堂が立ち並び、数多くの国宝・重要文化財が保存よく収蔵されていた。殊に金色堂（光堂）は名高い。三間四方の絢爛たる堂は、今日鉄筋コンクリート建ての新覆堂の中にすっぽりと収められている。壁、柱、組物、垂木にいたるまで金箔が押されている。また内陣の巻柱や須弥壇には螺鈿の漆芸と金工芸の粋があつめられ、三壇に分かれた須弥壇上の各々に本尊阿弥陀如来、さらに観音・勢至二菩薩の脇侍などが並んでいる。こうした形式は当時流行した阿弥陀堂のそれであるが、中央壇下には初代清衡の遺体が、南壇には二代基衡、北壇には三代秀衡の遺体と四代泰衡の首が安置されているというから、兼ねて葬堂の意味をも持っていたといえよう。金色堂の光輝は八百数十年



正法寺 総門前で

になんなんとする時を経て未だなお失われていない。さらに屋外には、西行法師・松尾芭蕉・宮沢賢治らの歌碑・詩碑がそこに建てられている。それらは詩情豊かにこの平泉の地によせる感慨をうたい、訪れるすべての人達に太古へのロマンを思いおこさせずにはおかない。

14..30 月見坂を下って中尊寺をあとにする。

15..10 正法寺到着。

ここは水沢市黒石町。曹洞宗門の寺院で正しくは大梅拈華山円通正法寺といい、現住は、大本山総持寺副貫首・成田芳髓禅師である。開山は大本山総持寺二祖峯山禅師の高足で、二十五哲中の最上首であった無底良韶禅師である。当地の黒石越後守正端と長部近江守清長の兩人が寺領山林を寄進し、壮大な七堂伽藍が造建されたのは貞保四年（一三四八）四月のことであったという。観応元年（一二三五〇）と嘉吉元年（一四四一）にはあいついで崇光天皇と花園天皇に綸旨を賜り、奥羽二州の僧録、日本曹洞第三の本寺、住持位末代着紫衣、奥羽二州の本寺の出世道場であることを認められた。以後、元和元年（一六一五）家康の『宗門法度』の定まるまでは、名実ともに曹洞宗第三の本寺として栄えた。現在の伽藍は幾多の火難等を経て山門、

仏殿などは礎石を残すのみであるが、一八、九世紀に造られたという客殿は、近年稀少となった萱葺のまま、その規模は日本一を誇っている。その豪壮なたたずまいは、往時の隆盛を雄弁に物語っているといえよう。また、宝物庫には三国相伝の仏舎利、両祖と開山の御霊骨、六代(道元・懐奘・徹通・瑩山・峩山・無底)の伝衣をはじめ、多数の貴重な什物、書画類が蔵されている。昨今、当寺院の再建の意気あがり、その準備も着実にすすんでいると、由、その成就を心より祈念して一行は本堂で経を誦した。僧堂を拝見してのち、帰途総門にいたれば、ふりあおいだ境内に一面の蟬しぐれが響いていた。

16..40 正法寺出発。

17..30 盛岡「ホテル東日本」に初日の宿をもとめた。

七月二一日(火)

08..00 ホテル発。本州最北端下北半島へと向う。目的地までの移動に最も骨の折れる一日がはじまった。小休止をとりながらひたすら北へとバスは走った。

12..30 昼食。

14..40 恐山到着。

バスを降りると一帯に硫黄の臭気がたちこめている。ここは下北半島の中央部に位置し、日本三大霊場(越中の立山・羽後の河原毛地獄山・奥羽の恐山〔以上「地獄」霊場〕)または、比叡・高野の両山と恐山をいうこともある。)のひとつとして名高い。恐山とは一名宇曾利山といい、海拔八七九メートルの休火山である。火口の宇曾利湖を中心に鶏頭、地藏、剣、大尽、小尽、北国、屏風、釜臥の八峰が、あたかも蓮華八葉のごとく周囲をとりまく広い地域を指す。今回の訪問は、毎年七月と九月に行なわれる恐山大祭のうち、七月二〇日から二四日にかけての祭典の様子を拝見しようと予め計画されていた。それにしても、目前にみるにぎわいは想像をはるかに絶していた。あいにく本尊が安置されている地藏堂は改修中であったが、仮本堂に拝登の挨拶にあがると法要が厳修されていた。この期間には例年大施餓鬼会と大般若会が盛大に修せられるという。ところで、現在この地には恐山菩提寺が山門を入った左手に建っているが、これはむつ市内の曹洞宗寺院円通寺を本坊としている。つまり、ここは円通寺の奥の院としてその管理下にあるということである。本坊には、事前に拝登のお願いにありがた、かねてよりお忙しい時節とお聞きして直接



恐山 地藏堂前景

地藏堂をお訪ねしたわけである。地藏堂の創建は、大永二年（一五二一）とも、また古くは貞観四年（八六二）ともいわれる。開基は慈覚大師円仁と伝えられ、その不思議な因縁は『円通寺縁起記』などにくわしい。ちなみにこの堂の御本尊は延命地藏菩薩であるが、慈覚大師自作のものと伝えられている。十万二千坪ともいわれる広大な境内には諸堂の他に賽の河原、三途の川、血の池、各種の地獄、霊湯や極楽ヶ浜などが散在している。そして、その間をわたる小路の傍には、さまざまの思いを託した石積みが無数にみられ、菓子や風車が添えられている。また、その一角ではイタコの口寄せがなされている。昨今はイタコも老齢化がすすみ、その数もあわせて三〇に足りないときく。大祭にはその大半が集まるといだが、我々の眼にしたのは二〇人にみたなかった。風雨をさける仮設テントが軒を連ねていて、それぞれの軒先にはイタコの名札が掲げられている。その奥に老婆達がちよつこりと座していて口寄せを行っている。深い思いを胸に抱いた人々の列ができていて、順番をまっていた。手狭な屋内でなおさら頭を近づけて聞きみみたてる人々の前で、イタコは数珠をくりながら何やら独特な調子で語りはじめる。流儀はいろいろあるよ

うであった。そうした人々のうねりのようなざわめきの中で、ふりあおげば御霊のあつまるおやまの景色は、この世のものとも思われぬ奇怪さにみちていた。

16..15 恐山をあとにして二日目の宿へ向う。

17..00 古牧温泉に着く。湯量日本一といわれる大岩風呂で旅の疲れをいやした。

七月二二日（水）

07..00 起床。

07..30 古牧温泉出発。最後の訪問地法光寺へ。

09..00 早朝から小雨の降るなか、国道を南下して三戸郡名川町に到る。めざす白華山法光寺は、県立自然公園名久井岳の山麓にあった。日本名松百選にえらばれた千本松の参道を通って境内に入る。早速本堂で拝登の報告をなす。新しい木の香ののこる一室で寺院の沿革など懇切におはなしいただいた。開山は玉峰捐城和尚、開基は鎌倉時代の執権、最明寺入道時頼公であるという。副住職からおききした二人の邂逅談などは実に心暖まるものであった。今日、当寺は宗門における奥羽三大本山のひととされる。また、本堂裏手には美しい遠州流庭園とりっぱな三重の塔があっ

た。この塔には、高祖道元禅師の御霊骨が奉安されている。当初八戸市の光龍寺に奉安され、さらにその本寺である法光寺に譲与されたのである。光龍寺を開かれた西有穆山禅師がこの地にもちきたらしめたものである。そのいきさつは種々論ぜられるが、いずれにせよ、この最北の地に御霊骨を奉安した承陽塔の建立されてあること自体が歎ばしく意義深いことであろう。この塔は高さ三三メートルもあり、現住檀山大典大和尚が苦心の末に建立されたとおききする。一行は承陽塔で誦経の後、宝物館で数多くの寺宝を拝見し、名残りをおしみつつ帰路についた。

10..00 法光寺立。途中、名物の椀子そばに舌つづみを打ち、花巻空港へ急ぐ。

13..15 花巻空港発。

15..40 名古屋空港帰着。東北二県にわたる二泊三日の旅を終えた。
(了)

*この旅行記をおわるにあたり、旅行中お世話になりました拝登諸寺院の御厚意にあらためて甚深の謝意を表することといたします。

昭和六二年度禅研究所活動記録

○ 役員会

- ・ 四月一〇日 「今年度活動計画について」
- ・ 十一月一〇日 「研究会講師選定並びに紀要の編集・発行について」
- ・ 十二月九日 「来年度予算計画及び参禅会規程改定について」

○ 参禅会運営委員会

- ・ 四月一〇日 「今年度活動計画について」
- ・ 九月二四日 「東北地方研修旅行の反省並びに会計報告」
- ・ 十一月一〇日 「講演会講師選定並びに来年度研修旅行について」
- ・ 十二月九日 「来年度予算計画について」

昭和六二年度禅研究所活動記録

○ 研修旅行

竹内道雄団長以下三三名の参禅会員が、七月二〇日から二二日までの「東北地方仏教研修の旅」に参加し、青森・岩手両県の諸寺院名跡を訪門した。

○ 火曜参禅会

原則として毎月第二火曜日に坐禅堂において開催された。開催日は次の通りである。

四月二一日、五月二二日、六月九日、七月一四日、九月八日、一〇月一三日、十一月一〇日、十二月八日（撰心会）、一月二二日、二月九日、三月八日。

○ 研究会・講演会

- ・ 研究会
昭和六三年一月一三日（水）午後一時三〇分より 学院会館
- ・ 講演会
「地方禅宗史の研究―越後・妻有地方を中心として―」
愛知学院大学教授・文学博士 竹内道雄先生

昭和六二年度禅研究所活動記録

六月二四日(水)午後一時三〇分より 学院会館

「宗学における両祖の位置」

駒沢学園女子短期大学教授・文学博士 東隆眞先生

一二月四日(金)午後一時三〇分より 学院会館

「戦後の中国仏教を考える―江南の仏教を中心として―」

中国杭州大学助教授 馬安東先生

○ 昭和六二年度禅研究所所員・研究員の学会研究発表

1 昭和六二年度日本仏教学会学術大会

日時 一〇月三日(土)、四日(日)

場所 東北大学

・天台智顛における仏陀観

大野 栄人

2 第三三回東海印度学仏教学会学術大会

日時 七月四日(土)

場所 愛知会館

・Markaṇḍeya Purāṇa にみる祖霊祭

引田 弘道

5 第三三回曹洞宗宗学大会

日時 十一月二五日(水)

場所 駒沢大学

・道元禅師の如浄禅師よりの伝戒

・道元禅師が記す宋朝禅の一考察

吉田 道興
佐藤 悦成

日時 九月一七日(木)、一八日(金)

場所 立教大学

・熊野地方における仏教諸宗の展開

・道元思想における主体について

佐藤 悦成
岡島 秀隆

4 第三八回日本印度学仏教学会学術大会

日時 六月六日(土)、七日(日)

場所 大谷大学

・「非心非仏」考

・北斉帝室と仏教

・道元禅師の受戒と伝戒考

・『正法眼蔵』「諸悪莫作」論考

・禅林における四時と四節―清規にみる―

鈴木 哲雄
諏訪 義純
吉田 道興
佐藤 悦成
成河 峰雄

3 第四六回日本宗教学会学術大会